ルターとバッハのオペラ

マニフィカート

2022/11/16

Sandro Botticelli　Madonna of the Magnificat　1483

教会のバッハとオペラ座のヘンデル

バッハ(1685-1750)はオペラを書きたかったのですが、書く機会はありませんでした。同年のドイツ生まれの音楽家ヘンデル(1685-1759)が 27 歳のころからロンドンへ渡り、貴族たちによるオペラ運営会社「王室音楽アカデミー」の責任者となって、オペラやオラト

リオを書いて富と名声をほしいままにしました。一方バッハは、小さな教会のオルガン弾きを長く務め、ようやく 23 歳の 1708 年、バッハは突然ミュールハウゼンの市参事会に辞表を提出して、ザクセン＝ヴァイマル公国の領主ヴィルヘルム・エルンスト公の宮廷オルガニスト兼宮廷楽師となりました。おかげで年俸は倍近くなりました。エルンスト公は音楽の保護につとめ、郊外のヴィルヘルム城にオペラ劇場を建設したりもしましたが、バッハは、オラトリオや多くのオルガン曲を書いたり、ヴィヴァルディの協奏曲様式を取り入れたりしてオペラは書いていません。1717 年、32 歳のとき、アンハルト＝ケーテン侯国宮廷楽長として招聘されて、ヴァイマルを離れました。

アンハルト＝ケーテン侯国の若き領主レオポルト侯（1694-1728）は、自らも音楽をたしなむたいへんな音楽愛好家でした。1717 年から 23 年の 6 年程の間バッハは宮廷楽長を務めました、この時期は彼の生涯のなかで、とりわけ輝かしく幸福な時期でした。この時期にバッハは、教会音楽を殆ど作曲していません。この侯国が信奉する宗教の教派は 100 年来カルヴァン派の改革派でした。カルヴィン派は禁欲的な教派で、教会音楽に制約もあり、シンプルな礼拝を重んじていました。この侯国にもルター派教会がありルター派の学校もありました。レオポルト侯の母はルター派の信徒でした。バッハがルターを好むのもこの影響があったのかもしれません。

器楽曲を書く

ケーテン侯は音楽を好み、バッハは数多くの器楽曲や世俗音楽の名作を作曲ました。バッハが宮廷楽団ととり組んだ重要な分野は協奏曲で、「ブランデンブルク協奏曲第 1 - 6 番 BWV1046-51」が有名です。名作「平均律クラヴィア曲集第 1 巻 BWV846 ～ 829」もこの時代の作品です。

アンナ･マグダレーナと再婚

1720 年に、侯爵のお供でカールスバートへ保養に行きましたが、その間に 13 年連れ添ったマリア･バルバラ Maria Barbara（1684-1720）が急死しました、二人の間に 4 人の子供が残されています。翌年の 1721 年、宮廷の女性歌手アンナ･マグダレーナ（1701-1760）と結婚式しました。花嫁 20 歳で花婿 36 歳でした。アンナは、結婚後、13 人の子をもうけ、バッハの写譜の手伝いもして大いにバッハの仕事を助けました。同じ時期に、レオポルト侯も結婚して花嫁を得ましたが、この侯妃は音楽に興味がなく、レオポルト侯までもが音楽に熱意をなくしてしまいました。

ライプツィヒの聖トーマス教会へ移る

そんなとき、1722 年、ライプツィヒの聖トーマス教会のカントルのクーナウが亡くなったので、教会音楽にも興味があったバッハは後任に応募して、1723 年 38 歳のときに聖トーマス教会のカントルに就任式しました。この職はトーマス教会付属のトーマス学校の教師と市の全教会の音楽監督という苛酷なものでした。トーマス学校は単なる音楽学校ではなく、現在のギムナジウムに当たる 12 歳から 23 歳の大学に入る前の 50 人から 60 人ほどの若者の教育機関でありルター派ラテン語学校でした。基礎科目と古典語、宗教教育、そして音楽も教えなければなりませんでした。生徒たちの声楽と器楽のレッスンを行い、生徒の生活の管理役を務め、また、ライプツィヒ市の葬儀にも奉仕し、ラテン語の授業も重要な任務でした。バッハは、「マタイ受難曲」や数多くのカンタータを書いて、宗教音楽の父と言われながらもライプチヒの聖トーマス教会からの脱出を狙っていました。でも、バッハはオペラを書きました。それが、「マニフィカート」と「マタイ受難曲」です。

マニフィカート
Magnifcat

［原　作］　ルカによる福音書第１章第 46 節-55 節。
［作曲者］　ヨハン・セバスチアン・バッハ（1685-1750）
［作曲年］　1723 年（38 歳）
［初　演］　1723 年レイプチヒ聖トーマス教会のクリスマスの晩歌。変ホ長調。
　　1728/31 年ニ長調に編曲。
［歌　手］
　ソプラノ　Ⅰ
　ソプラノ　Ⅱ
　アルト
　テノール
　バ　　ス
　混声５部合唱
［演　奏］　３０分。
［楽器編成］
　フラウト・トラヴェルソ（横笛）２、オーボエ２（オーボエ・ダモーレ持ち替え）、トランペット３、独唱（ソプラノ２、アルト、テノール、バス）、ティンパニ１対、混声五部合唱（ソプラノ２、アルト、テノール、バス）、ヴァイオリンⅠ、Ⅱ、ヴィオラ、通奏低音（チェロ、コントラバス、ファゴット、オルガン）
［解　説］
　1723 年、バッハはアンハルト＝ケーテン侯国の宮廷楽長を辞めて、ライプツィヒの聖トーマス教会のカントル「トーマスカントル」に就任します。その年のクリスマス週間に「マニフィカート」変ホ長調（BWV.243α）を書きました。通常のラテン語のクリスマス用のルカ伝の聖句「マニフィカート」の間にクリスマスにふさわしい内容の４曲の挿入曲を加えました。その後、1728 年から 31 年にかけて、バッハはこの作品を、挿入曲を除き、調性をニ長調にして書きなおしました。これが現在使われている［BWV243］です。変ホ長調からニ長調への移調は、Ｄ管トランペットが用いられるためであり、それに加えてフルート二本が追加されています。おかげで、トランペットやティンパニが派手に活躍する華やかで祝祭的で劇的な作品となりました。クリスマスだけではなく、復活祭や聖霊降臨祭の晩課にも用いられています。「マエフィカート」は、カトリックでは、伝統的に最も重要な晩課のための音楽でしたが、バッハ時代のルター派においても、ラテン語の「マニフィカート」は、祝祭日にもよく歌われました。特に、ルターは、自ら『マリアの賛歌』という小文を書いているほどこの「マニフィカート」は、数ある聖書の聖句の中でも、最も重要なものであると思っていました。岩波文庫に訳があります。そのことは、また、あとでお話しましょう。

二つの聖書　「旧約聖書」と「新訳聖書」

キリスト教の教義を、もっとも端的に示すものは「聖書」です。そのキリスト教の「聖書」は、二つあります。「旧約聖書」と「新約聖書」です。そのうちの「旧約聖書」は、ユダヤの人々とユダヤの神との契約を記したものです。このとき、人民と神との間に入って、神との契約をはじめ、神の声を人々に伝える役割を担うのが「預言者」（prophet）です。この場合の「預言者」とは、未来を予想する「予言者」(prophecy　/prediction)とは違い

ます。文字通り、「神からの言葉を預かっている者」のことです。神の代理です。その「旧約聖書」には、「神さまが、信仰深いユダヤの人々を哀れんでこの世に神の子をお授けになる」と書かれています。

「新約聖書」は、「旧約聖書」とまったく違って、「旧約聖書」に書かれた神の子を、神が実際に地上にお送りになられたことを伝えた記録です。その神の子とは、ナザレの町の車大工のヨセフとマリアの間に生まれたイエスです。イエスは普通の子供だったのですが、イエスが生まれるまでに色々な奇跡が起こり、また、洗礼者ヨハネが現れて、神の子の到来を告げたりしました。そして、成長するにつれて、イエス自身も色々な奇跡を行い、「旧約聖書」に書かれていることを次々に実現していったので、ユダヤの人たちは、「イエスこそ、神の子だ。救世主(キリスト)だ」と信じるようになりました。それで、「イエス・キリスト」というようになり、イエスの生涯にわたる言葉や行いを集めて新しい聖書「新約聖書」を作り、キリスト教を興しました。しかし、イエスが神の子ではないと思う一部のユダヤ教の人々もいました。「まだ、神の子はこの世に現れない」として、「イエス＝キリスト」とはいわず、また、「新約聖書」は信ぜず、「旧約聖書」だけを「聖書」としています。

イエスの生涯を記した「新約聖書」

「新約聖書」は、まず、イエスの生涯を三人の信者が記した三つの物語で始まります。それを、書いた作者の名前をつけて、「マルコによる福音書」「マタイによる福音書」「ルカによる福音書」とよんでいます。「福音書」の「福音」(ふくいん)とは、「神がこの世に自らの子を差し向けたことは、最高の喜びである。幸福な知らせである」という意味です。それで、マタイとマルコとルカを「福音史家」といいます。それぞれが、イエスの生誕(マルコはのぞく)に始まり、伝道と逮捕と磔刑(たっけい:はりつけの刑)と復活までを描いたものです。内容はほぼ同じなので、この三つの福音書は「共観福音書」と言います。でも、三つの福音書とも、書かれた時期と場所はそれぞれに違うので、描き方はそれそれに異なります。

先駆者ヨハネ

イエスの生誕を、もっとも詳しく、詩的に描いたのは福音史家のルカでした。ルカは、イエスの生誕を、イエスの「先駆者」(Forerunner)で預言者でもある洗礼者ヨハネの生誕から始めます。先駆者とは、信心深い人たちに、「この世に間もなく、救い主が現れるぞ」と言って廻る人のことです。

ヨハネの存在は、「旧約聖書」でも預言されていて、「ルカによる福音書」ではそれを引用して次のようにいっています ―

「彼(ヨハネ)はヨルダンのほとりの全地方に行って、罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマ（洗礼）を宣べ伝えた。それは、預言者イザヤの言葉の書に書いてあるとおりである。すなわち「荒野で呼ばわる者の声がする、『主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ』。すべての谷は埋められ、すべての山と丘とは、平らにされ、曲ったところはまっすぐに、わるい道はならされ、人はみな神の救いを見るであろう」。[ルカ：3-4]

この先駆者は、神の子と同じぐらい、神性を持ち、人々の信頼がなければなりませんでした。「神の子が来臨する」と説いて廻ったヨハネも、時々、神の子と間違えられました。それで、そうではないといいつづけなければなりませんでした。

「わたしは水でおまえたちに洗礼を授けるが、わたしよりも力のあるかたが、おいでにな

る。わたしには、その靴の紐を解く値ちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちに洗礼をお授けになるであろう」［ルカ：４-１６］

そのときのヨハネの様子を描いたのが、有名なレオナルド・ダ・ビンチの「洗礼者聖ヨハネ」です。神秘的な笑いを顔に残した性別不詳な人物が、身体の前で手を延ばして天を指さしています。この絵は、ダ・ヴィンチが、「モナ・リザ像」と同じく、死ぬまで自分の手元において終身、身体から話さなかった絵の一つです。ヨハネが天を指さしながら、「私は神の子ではない。その方は、天から降りてこられる」と言っているのです。ですから、私は、この絵は、「洗礼者聖ヨハネ」の絵ではなく、「イエス・キリスト」の絵であると言うべきだと思います。

また、イエスもヨハネのことを次のように言っています ―

「見よ、『わたし（神）は使いをあなたの先につかわし、あなたの前に、道を整えさせるであろう』と（『旧約聖書』に）書いてあるのは、この人のことである」［ルカ：７－２７］

「あなたがたに言っておく。女の産んだ者の中で、ヨハネより大きい人物はいない。しかし、神の国で最も小さい者も、彼よりは大きい」［ルカ：７-２８］

でも、結局は、ヨハネはイエスよりも神の子として先に生まれていながら、イエスの先導役にすぎません。いわゆる、ナンバー・ツーです。この思いが彼の生涯を決定したのかも知れません。イエスほどには人気が出ず、言うことも堅苦しく、教えも厳格で、教条主義的な性格が彼の人生の出来事に大きく影響しています。でも、イエスを敬うこと、人一倍です。

聖書でも、ヨハネの容貌や姿は、次のように荒々しい野人として描かれています ―

「ヨハネは、らくだの毛衣を着て、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた」
［マタイ伝：03-:04」

そして、最後には、魔女サロメによって、首を刎(は)ねられます ―

「そのころ、領主ヘロデはイエスの評判を聞き、 家来たちにこう言った。『あれは洗礼者ヨハネだ。死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている』。実はヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアのことでヨハネを捕らえて縛り、牢に入れていた。 ヨハネが、「あの女と結婚することは律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。 ヘロデはヨハネを殺そうと思っていたが、民衆を恐れた。人々がヨハネを預言者と思っていたからである。 ところが、ヘロデの誕生日にヘロディアの娘が、みんなの前で踊りをおどり、ヘロデを喜ばせた。それで彼は娘に、『願うものは何でもやろう』と誓って約束した。 すると、娘は母親にさとされて、『洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、この場でください』と言った。 王は心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、それを与えるように命じ、 人を遣わして、牢の中でヨハネの首をはねさせた。その首は盆に載せて運ばれ、少女に渡り、少女はそれを母親に持って行った。それから、ヨハネの弟子たちが来て、遺体を引き取って葬り、イエスのところに行って報告した。 イエスはこれを聞くと、舟に乗ってそこを去り、ひとり人里離れた所に退かれた」 ［マタイ伝：１４－０１］

先駆者ヨハネの受胎告知

さて、そのバプティスマ(洗礼者)のヨハネの生誕についてですが、ここにでも奇跡がおこなわれます。ユダヤの王ヘロデの時代のことです。イエスを産むことになっているマリアの親類に、年上のエリサベツがいます。エリサベツの夫のザカリヤは祭祀で、二人とももう高齢で、子供が産まれることはないと思われていました。ある日、ザカリヤが教会内で香を焚いているとそこへ天使が現れて、ザカリヤにいいました ―

「なんじ恐れるな、あなたの妻のエリサベツは男の子を産むであろう。その子をヨハネと名付けなさい」【ルカ伝：１-１４】

これが、「エリサベツのヨハネの受胎告知」です。その後、エリサベツは身ごもって６ヶ月がたちました。

神の子イエスの受胎告知

今度は、天使はナザレの町のマリアを訪れました。

「あなたは、恵まれた。主があなたと共におられる。聖霊（The holy spirit）があなたに降り，あなたは身ごもって男の子を産む。産まれる子は、聖なる者。神の子と呼ばれる。その子をイエスと名付けなさい。あなたの親類のエリサベツも男の子を身ごもっている」【ルカ伝：１-３５】

これが、「マリアのイエスの受胎告知」です。

マリアはこたえました ― 。

「私は主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」【ルカ：１-３８】

5月31日　マリアのエリサベツ訪問。

次第にお腹が大きくなり始めたので心配になったマリアは、同じ境遇にあるエリサベツを訪ねるために山里のユダの町に行きました。マリアが来ると知ったエリサベツは、山を降りて途中まで出迎えました。二人は、山の途中で会いました。二人が出会ったったとき、お腹のなかで赤ん坊たちが喜んで踊りました。このときが、ヨハネとイエスの初めての出合いでした。後に、二人とも、悲憤で非業の死を遂げます。この訪問の日を、教会では５月 31 日として祝日にしています。因みに、ヨハネの誕生日は６月 24 日であり、イエスの誕生日は 12 月 24 日です。ヨハネは，イエスよりも半年、年上です。兄の位置にあります。兄が弟を守るように、ヨハネは献身的にイエスを守ります。

エリサベツはマリアを祝福していいいました ―

「あなたさまは女の中でもっとも祝福された方です。お腹の中のお子さまも祝福されています。主が仰ったことは必ず祝福すると信じた方はなんと幸せでしょうか」
【ルカ：１-４２】

マリアの賛歌

そこでマリアは、このエリサベツの言葉に感動して神を讃えました ―

「わが魂は主を主をあがめます」（Magnificat anima mea Dominum,）
【ルカ：１-４６】

ここでマリアが神を賛美した美しい言葉が、マリアの賛歌「マニフィカート」です。

Magnificat	マニフィカート
1 Magnificat anima mea Dominum,	わたしの魂は主をあがめ、
2 et exsultavit spiritus meus in Deo salutari meo,	わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。
3 quia respexit humilitatem ancillae suae. Ecce enim ex hoc beatam me dicent	身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も
4 omnes generationes,	わたしを幸いな者と言うでしょう、
5 quia fecit mihi magna, qui potens est, et sanctum nomen eius,	力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、
6 et misericordia eius in progenies et progenies timentibus eum.	その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます。
7 Fecit potentiam in brachio suo, dispersit superbos mente cordis sui;	主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、
8 deposuit potentes de sede et exaltavit humiles;	権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、
9 esurientes implevit bonis et divites dimisit inanes.	飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。
10 Suscepit Israel puerum suum, recordatus misericordiae,	その僕イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません、
11 sicut locutus est ad patres nostros, Abraham et semini eius in saecula.	わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対して永久に。
12 Gloria Patri et Filio et Spiritui Sancto. Sicut erat in principio et nunc et semper et in saecula saeculorum. Amen.	父と子と聖霊に栄光あれ、初めにあったように、今も、いつも代々限りなく。アーメン。

ついでに、「英訳文」（日本聖書協会版）も載せておきます。

My soul magnifies the Lord, and my spirit rejoices in God my Savior,
for he has regarded the low estate of his handmaiden.
For behold, henceforth all generations will call me blessed ;
for he who is mighty has done great things for me, and holy is his name.
And his mercy is on those who fear him from generation to generation.
He has shown strength with his arm, he has scattered the proud in the imagination of their hearts, he has put down the mighty from their thrones,

and exalted 高める those of low degree he has filled the hungry with good things, and the rich he has sent empty away.
He has helped his servant Israel, in remembrance of his mercy,as he spoke to our fathers, to Abraham and to his posterity 後世の人々 forever.

ルターの説く「マニフィカート」の真意と偉大さ

先にお話しましたように、マルティン・ルター(1483-1546)は、このマリアの言葉「マニフィカート」を最大に評価しています。1517 年、ルターが教皇庁による免罪符発行を批判する「九五か条の意見書」を発表したとき、ローマ教皇庁がルターを破門し、ルターの身柄をローマに送るように、ルターの保護者であるザクセン選帝侯フリードリヒ賢候に要求しました。[1520 年] そのとき、選帝侯の甥の未だ若いザクセン公ヨハン・フリードリヒが強く反対してルターの身を守りました。ルターはそれに感謝してヨハン・フリードリヒに書いて与えたのがこの書です。[1521 年3月 10 日] この書は、すべての宗教界を敵に回したこの切羽詰まった自身の状況において、後に領主となる若者にその心得を説くために、ルターがどうしても書かざるを得なかったことを書いた稀有(けう)の書です。自分の神に対する考えの主張であると同時に、優れた権力者が持たざるを得ない信念について述べた「偉大なる書」でもあります。それが、マリアのこの言葉によって、「マニフィカート」によって、すべてが現れているのだ ― とルターは説くのです。これは、驚くべきことです。ルターにかかると、神も、マリアも、領主も、宗教も、聖書の文句のすべてが、人の正しい生き方にかかわってくるのです。私も、バッハの「マニフィカート」に興味を持ったとき、ルターの書を知ってそれを読みました。それで、偉大な宗教家ルターを身近に感じました。

むろん、バッハもこのルターの書は読んでいたことでしょう。そして、共感したことでしょう。それは、彼の「音楽」と「曲の構成」から分かります。特に、最初に書いた「変ホ長調 BWV243α」の「マニフィカート」からクリスマス用の四つの挿入曲を外して、新しく、一般の祭日用に「ニ長調 BMV243」に書き換えたのはルターの『マリアの賛歌』を読んだ影響かとも思われます。

「マリアの賛歌」という訳について

このルターの書の偉大さは、日本語に訳した石原謙が、冒頭に丁寧な解題を記しています ―

この書の原名は、『マニフィカートのドイツ語訳ならびに講解』であるが、『マニフィカート』とは新約聖書ルカ傳第1章４６節以下５５節までに記されたマリヤの神に対する讃歌のことで、ラテン語聖書ではそれが「マニフィカート・アニマ・メア・ドミヌム』(わが心は主を崇[あが]める) を以て始まっているため、習慣上一般にその初句の「マニフィカート」(われは崇める) をとってその讃歌全体の名称としているのであるから、ルターのこの書の書名もその意味をとって『マリヤの讃歌』と訳した次第である。【訳者解題５頁】

この「マリアの賛歌」と言う訳は、誤解を招きます。実は、このルターの書は「マリアが神を賛美して歌った聖句」の解説なのですが、「マリアの賛歌」と言ってしまうと「マリアを人々が賛美した書」ともとられかねません。この誤解を、訳者の石原謙氏は畏れて言っているのです。同じことで、イエスに関する本には、「マタイ伝」「マルコ伝」「ルカ伝」「イエス伝」とありますが、どれも「イエスに関する伝記」のことです。「マタイ伝」といっても「マタイに関する伝記」ではありませんし、「イエス伝」といってもイエスが自分で書いた自伝ではありません。他の人が書いた「イエスの物語」です。すべてが、「イエス伝」です。ややこしいことです。

「マニフィカート」の真の偉大な意味

訳者の石原謙は、次のようにいいます ―

> カトリツク教会ではこの讃歌を時に尊重して、毎日晩祷の際に之を用い、しかも他の歌とは区別して特に声高く、ゆるやかに歌い、その間、聖壇に香を焚くなどする。しかるにルターによれば、この尊重はまことに正しいけれども、そこに見られるマリヤへの讃美崇拝はかえってその讃歌におけるマリヤの真意を没却するものである。【訳者解題５頁】
>
> なぜなら神の母たるべき大きな賜物を受けた賎（しづ）の乙女マリヤはこの、讃歌において、自分の無なる身が神の御顧（かえり）みを受けたことを歌い、しかも自らを誇ることなく、すべての業（わざ）と讃美とを神にかえし、人が彼女の謙遜や貞操がこの大きな賜物をかち得たかのごとく見なしてこれを讃美することをではなく、彼女の自ら値せずして得たこの賜物のゆえに神を讃美することをこそ望んでいるのであるからといって、ルターはこの讃歌の中にも、人は自己の善行によってではなく、ただ信仰によって義とせられるという彼の新しく提起した信仰の根本精神の証（あかし）を見、またこの精細によってこの讃歌を理解し、マリヤのこの態度を模範としつつ、人はその運命を神においていかに理解し、いかに対応すべきかを説き、自己の徳と賢さと富貴権勢のゆえに驕（おご）り高ぶらず、かえって神を畏（おそ）れ慎（つつし）み、自己の汚辱貧賎無力のゆえに嘆かず、気おちせず、かえって神の恩寵を期待すべきことを教へる。【訳者解題６頁】

まさに、この聖句を「マリアの賛歌」と言われる由縁がこれです。「マニフィカート」は、人々が「マリアを賛美する歌」ではなくて、マリアが「神を賛美して歌った歌」なのです。なぜ、マリアは神を賛美して歌ったかと言えば、神は自らの子をこの世に送り出すのに、身分の高い者の娘やお金持ちの娘を選んだのではなくて、汚辱貧賎無力な「賎の乙女」マリアを敢えて選んで下さったことに、平民を代表して感謝したからです。そのことに対するマリアの謙虚な姿勢がこの歌の真意です。ここでの「賎の乙女」という言葉は、いまは、「不快語」だとして讃美歌でも使われなくなりました。（賛美歌111番「神の御子は」）

ルータが、「自己の徳と賢さと富貴権勢のゆえに驕（おご）り高ぶらず」というとき。これは権力者についても言えることです ― と若いザクセン公ヨハン・フリードリヒに説きます。

> すべて君主は、畏（おそ）れるべき人間をもたぬゆえに、他の者にもまして神を畏れ、神とその御業とを正しく認識し、聖パウロ（ロマ書第１２章）が「治むる者は慎み深くあれ」と申しております通り、慎みを以て振舞ふことが必要でございます。然るに私は全聖書の中で、この点に有益なること、浄福豊かな神の御母の、この聖なる歌にしくものを他に存じません。実にこれは、凡て善政を施し、良君主たらんと欲する人々の、常

に学びかつ銘記すべきところのものでございます。その中で彼女が恐らく最も美はしく歌っていると存ぜられますのは、神に対する畏れについてのところであり、また神はいかなる主にて在しますか、ことにその御業は尊貴卑賤（そんきひせん）の中にいかように現れるか、についてのところでございます。他の者にはその恋人が歌う俗世の歌を聞かせておくが宜しい。聖君侯たる者は、この淑（しとよ）かな処女が歌って聞かせる霊的にして清純かつ有益なる歌に耳をかたむけるのが至当でございます。【本文１７頁】

結局、プロテスタントのルターが、この書で説いたことは、二つ、ありました。「マニフィカートは決してマリアを賛美した歌ではなく、神を賛美したものだ」と言うことです。カトリック教会の「マリア崇拝」（Marianismo, Mariolatry）や「マリア崇敬」（devotion to Mary）に対する警戒の書でもあります。おうおうにして、作曲家はその立場によって、「マリア崇拝」に傾くとがあるからです。このことは、「マニフィカート」の音楽を聴くときには、特に注意しておくことが必要です。

ルターが書いた『君主論』である『マリアの賛歌』

もう一つは、この『マリアの賛歌』によって、若き貴族のために指導者としてのあるべき指針を示すことでした。一種の『君主論』でもあります。聖歌「マニフィカート」は、極めて宗教的な言葉であるのに、マキャヴェッリの書いた『君主論』と同じ内容を持つものだとはとても思えません。でも、ルターは明らかに、『君主論』を書いたのです。君子が、「神（支配者）はいかなる主（あるじ）であるか」、また、「その御業（施行）は尊貴卑賤である民衆の中にいかように現れるか」を知るには、「マリアがこの『マニフィカート』で歌って聞かせる霊的にして清純かつ有益なる歌に耳をかたむけるのが至当である」とルターは説くのです。そのことは、また、詩句を解説していく中でお話します。

「マニフィカート」に名曲は多い

「マニフィカート・アニマ・メア・ドミヌム」で始まる、このラテン語で書かれた詩文は、美しくもまた、神秘的なものです。それで、多くの作曲家が多くの作品を残しています。有名なものは、グレゴリオ聖歌に始まって、モンテヴェルディにパレストリーナ、テレマンにパッヘルベルなどなど、私の好きなのはフランスのマルク＝アントワーヌ・シャルパンティエ の大・中二つの「マニフィカート」などです。どの作曲家のものも名曲です。聖句が素晴らしいので、曲もいいのです。エストニアの現代作曲家アルヴォ・ペルトにも、７曲もの「マニフィカート」があります。どれも、清潔で、聖的で、瞑想的です。ただ、先に述べたように、作曲家の信仰の在り方によって、「マニフィカート」が「マリア崇拝」や「マリア崇敬」（devotion to Mary）になってしまわないかという危惧もあります。

名曲の多い「マニフィカート」ですが、特に有名なのはバッハの書いた「マニフィカート」です。バッハの宗教音楽の作曲家としての才能が、詩の深い内容を音楽によってその真実を伝えることを可能にしています。

それで、今回は、バッハの「マニフィカート」を聞きましょう。
そして、ルターの『マリアの賛歌』を読んでいきましょう。

バッハの「マニフィカート」からは、いつ聴いても大きな感動を受けます。

「マニフィカート」を歌うマリア三つの諸相

バッハの「マニフィカート」は、いつ聴いても大きな感動と感銘を与えてくれます。全体的にも、各曲においても、寸分の隙もない、完璧な音楽です。「マニフィカート」の聖句は１２に分けられていますから、歌も全部で１２曲に分けられています。このそれぞれの１２曲は、演奏者の配合による全編の構成が素晴らしいのです ― などというと、不思議にお思いになられるでしょう。なぜなら、この「マニフィカート」は、マリアが神の御業に感動して思わず声にした「マリアが神を賛美する歌」なのですから、マリア一人が歌う歌でいいのです。ソプラノか、ボーイ・ソプラノが、一人で１２の全聖句を歌えば良いのです。それなのに、むろん、ソプラノのソロはありますが、それもソプラノ１と２がそれぞれに歌ったり、混声５部合唱や二人のソプラノのデュオやソプラノとアルトのデュオや女声三人のトリオがあります。中には、男声のソロも歌います。男声と女声の二重唱もあります。詳しくは、以下のように、１２曲とも、合唱以外は、すべて違った組み合わせの歌手たちによって歌われます。どうして、こうなったのでしょうか？　なぜ、マリアの言葉を男声が歌うのでしょうか？

ルターのドイツ語訳と講解に基づく

それは、この聖句「マニフィカート」を作曲するに当たり、バッハはルターの書『マリアの賛歌』（『「マニフィカート」のドイツ語訳と講解』）を読んだと思われるからです。バッハは、ルターの解釈に基づいてこの曲を作曲しました。すなわち、バッハは、この「マニフィカート」の聖句の内容を、**「聖句を歌うマリア自身の立場」**（ソプラノⅡ）と**「聖句によって歌われる対象となる人物とその事柄」**（そのほかの声部）と**「聖句を客観的に見て論じ語る立場」**（合唱）の三つに分けて作曲しているからです。それぞれ、歌う人が、「聖句の内容」を歌うのです。その聖句で述べられた「主人公の役柄」で歌うのです。聖句をソロで歌うときには、バッハも、「聖句によって歌われる対象となる人物とその事柄」に合わせて作曲したからです。オペラのアリアと同じです。それでバッハの「マニフィカート」は「マリア三つの諸相(姿)」があることになります。

１　句を客観的に見て論じ語る立場

聖句を全合唱で歌うのは、会衆すべてがそれに同意するからです。

第１曲の「マニフィカート」です。全合唱と全オーケストラが一斉に歌い、奏でます。

まず、歌うのは「全合唱」です。最初の第１の聖句「わたしの魂は主をあがめ」です。これは、マリアが感動して発した心からなる言葉ですから、ソプラノのソロで歌われるべきです。でも、ルターの解釈は、違います。

「マニフィカート」といふ言葉。これは「大きくする」「崇める」「その人を尊ぶ」といふ意味で、偉大な多くの善き事をなす能力と知能と意志とをもつ人について用いられる。それはあたかも、つづいてこの讃歌の中に歌われている通りで、それゆえ、正に「マニフィカート」というこの言葉は、あたかも書物の標題がその中に書かれている内容を示している如く、マリヤ自身もこの言葉を以てその讃歌が歌うところの内容を示しているのである。その内容とは即ち神の偉大な御業と御働きとのことで、我々の信仰を強くし、すべて微賤(びせん)な者共の心を励まし、およそ地上の尊貴な人々を畏れしめるところのものである。我々はその三つの目的のためにこの讃歌が用いられ、利用されるよう計らなければならない。なぜなら、マリヤはこれを自分一人のためにではなく、我々すべてのために歌い、我々が彼女に踵いてこれを歌うようにと願ったのであるから。【３４頁】

それで、バッハは、「マニフィカート」の最初の聖句を「合唱」に歌わせたのです。**「聖句を客観的に見て論じ語る立場」**からの作曲です。曲の開始を合唱で歌わせるのは。イタリア・オペラの開幕で歌われる「開幕の合唱」(coro　intoruduzione)と同じ手法です。華やかで、堂々として式典にふさわしく、演奏者全員からなる客席の人々へのあいさつです。

あと、バッハは、全部で１２句の内の次の四つの聖句を「全合唱」で歌わせています。第３句の全合唱「いつの世の人も」と第７句の全合唱「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし」と第１１句の全合唱「わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対して永久に」と第１２句の全合唱「父と子と聖霊に栄光あれ、初めにあったように今もいつも代々限りなく。アーメン」です。これは、会衆全員が自ら参加し関わっている賛歌ですから当然です。

２　「聖句を歌うマリア自身の立場」

第２句の「わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます」はソプラノⅡによって歌われるアリアです。聖句「マニフィカート」の前句は、マリアが思わず叫んだ言葉です。ですから、これは当然、マリアが歌わなければなりません。それで、この第２句は、マリア役のソプラノⅡのソロが歌うのです。でも、声の高いソプラノⅠではなく、声の低いソプラノⅡで歌われるのはなぜでしょうか？

第３句は、マリアの魂と霊が、神をあがめたたえる理由を歌います。「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者と言うでしょう」。ここで初めてソプラノⅠがマリアとなって登場し、憐み深くアリアを歌います。

３　聖句によって歌われる対象となる人物とその事柄

マリアの聖句の対象となった人物がソロや重唱で歌います。特に、崇めたてられる神を務める男声のソロがたくましく歌うのは印象的です。

第５句の「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く」は、

力強い男声のバスが、その「力ある方」すなわち、偉大な神となってアリアを堂々と歌います。

第６句は、アルトとテノールの二重唱で「その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます」と美しくも優しく歌います。

第８句は、テノールのアリアで「権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ」と激しく歌います。このときのテノールは、神さまの役です。権力あるものを追い払う役なので、男です。

第９句は、「飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」とアルトがソロでアリアを歌います。

第１０句の「その僕（しもべ）イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません」は、ソプラノ１とⅡとアルトのソロによる女声の三重唱です。

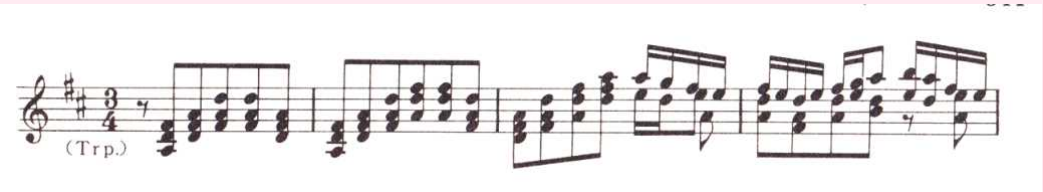
あとの第１１句と第１２句はマリアの言葉ではなく、こう言った賛歌などの終わりには、典礼の規則に則った「栄唱」（Gloria）が歌われます。すべてを祝福する決まり言葉で終わるのです。

ヨハン・セバスチアン・バッハ作曲

マニフィカート

第0曲　リトルネロ　二長調　3/4拍子。

トランペットのファンファーレが鳴り、ティンパニが響いて、全オーケストラの「リトルネロ」（全合奏）で始まります。このオーケストラの前奏は、極めて重要で、全曲を象徴するものです。次に出てくる合唱の部分も前もってオーケストラで演奏してしまいます。合唱のあとのオーケストラの後奏もまた同じことの繰り返しになり、同じ曲による「Ａ（オケ前奏）＋Ｂ（合唱）＋Ａ（オケ後奏）」の三部形式になります。また、全曲の締めくくりである最後の１２曲「グローリア」もこの前奏の演奏で終わります。



1　わたしの魂は主をあがめ “Magnificat anima mea Dominum,”

オーケストラの全合奏につづいて、これも全合唱が喜びに満ちて、「賛美します（マニフィカート）、賛美します」と速い短い音符で、まるで興奮しているかのように、われ先に口々に神を賛美します。まさに、百家争鳴、百花斉放（ひゃっかせいほう）です。「マニフィカート」は、「マニフィカート」と「ニ」にアクセントがあるので、「ニフィカート」「ニフィカート」と言う言葉が重層的に聞こえてきます。

まず、この最初の聖句「わたしの魂は主をあがめ」（マニフィカート・アニマ・メア・ドミヌム）ですが、「私が主をあがめる」ではなくて、「私の魂（アニマ・メア）が主（ドミヌム）を拝める」となっています。なぜ、「私」ではなくて、「私の魂」なのでしょうか？

実は、欧米では、こう言った表現は意外に多いのです。これは、肉体を持った人間である「私」が、直接、神に語り掛けるのでは失礼に当たるからです。英語で「人間」は"human"といいます。「ヒューマン」には、「神や動物と比べての人間」という意味があります。「神には及ばないが、下卑た動物ではない」ということです。この聖句の第４行には「humilitatem」（婢:はしため）という言葉があります。それで、「肉体を持った卑（いや）しいフミリターテム（はしため）のヒューマン（人間）ではなく、私の純なる魂が、あなたさまを敬い、尊ぶのです」と言うのです。日本でも、自分よりも目上の方に手紙を出すときに、相手の名前を直接指し示すのではなく、「侍史」（じし:お付きの人・秘書）とか、「机下」（机の下）とか、「膝下」（しっか:お膝の下）とか、一段と控えたところへ、まず差し出すのです。「陛下」の「陛」は「階段」のことです。「殿」（どの）も「大きな建物」のことです。外国でも、

お殿さまをいうときに、直接、「You」（あなたさま）ではなく、「your highness」（あなたさまの偉大さに）とか「your majesty」（あなたさまの威厳に）といいます。それでマリアも、「私＝自分」ではなく、「私のアニマ（魂）が」といっているのです。

ドイツ語で、「ご馳走さま」は、" Es schmeckt mir sehr gut." （それが私をして美味しくさせる）といいます。主語は、「私」（Ich）ではなく、「それ」（Es＝料理）です。これも変な表現です。食べた自分の肉体が「美味しい」と思ってはいけないのです。それでは、欲望に走って、「恥をかく」（humiliate）からであり、「卑しい」（humble）からです。

このことを、ルターは次のようにいいます ―

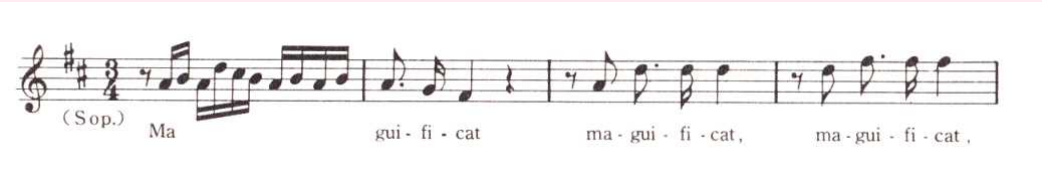
> これは、彼女の心情と生命とがことごとく霊にあって内から高揚しているその時の、絶大な感激と溢れ来る喜びとから賛した言葉である。それゆに彼女は「われは神を崇（あが）む」といはないで、「わ魂は」という。あたかも「私の生命と私の全心意とは神への愛と讃美と絶大な喜びとの中に浮動し、そのため私は自分白身を抑へられず、自ら起って神を讃美するというよりは、むしろ神を賛美せざるをえないように引きたてられる」と言わんと欲するかのごとくである。実際、神の甘美な愛とその御霊とに浸されて、口に言えぬほどにこれを感じている人々は、みなそうである。【２８頁】

また、「魂」について、ルターは次のようにいいます ―

> 魂は人間の最高、最深、最貴の部分で、人間が捕捉し難く目に見難い永遠の事物を把握することを得るゆえんのものである。約言すれば、それは信仰と神の御言葉とが住まふ家である。【30頁】

第１曲　合唱「マニフィカート」ニ長調４/４拍子。

合唱は、ソプラノⅠとソプラノⅡとアリアとテノールとバスの混声５部です。まず、「マニフィカート」と歌い始められます。これは、マリアが感動して、思わず口をついで叫んだ感謝の言葉なのです。実際はマリアとそれに共和したエリサベツとお腹の中のイエスとヨハネの四人が叫んでいるのですが、これはまるで沢山の鳥たちが一斉に鳴き叫んでいるように聞こえます。５声部がフーガにもなるので、多声音楽ポリフォニーの様に聞こえますが、時々、一斉に「マニフィカート！」と揃って歌うので、全体として讃美歌のようにホモフォニックな響きとなって聞こえます。群衆が心を揃えて神を賛美する賛歌の効果をあげていて見事です。特に、トランペットとティンパニが大きな音で大活躍します。その壮大さは、まさにバッハのオペラです。



２　わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。
“ et exsultavit spiritus meus in Deo salutari meo,”

ついで、また、同じように、マリアは神を賛美して「賛美の歌」を歌いますが、今度はソプラノだけがソロで静かに歌います。同じ賛美の繰り返しではなく、「喜び讃える」（exsultavit）喜びの歌なのです。 今度は言葉を換えて、主語を「わたしの霊(spiritus)」として、言葉も「救い主である神を喜びたたえる」という文句にします。ここでは、私の「魂」（anima）ではなくて、「霊」（spiritus）としたのは、同じ言葉を繰り返す愚を避けて、ただ表現上、言葉を換えただけです。前に用いた「アニマ」は、「アニメイション」の「アニマ」であり、「動物」（animal）の「アニマ」です。生きて動くものです。「たましい」です。今度の「スピリトゥス」は、英語の「スピリット」（spirit）です。「精神」であり、「精霊」のことです。どちらも、おなじことを現します。

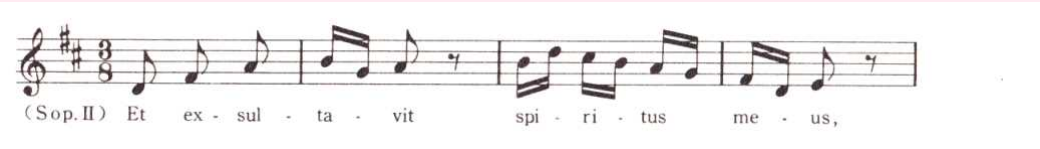
ルターは、「霊」（spiritus）について、次のように言います ―

「霊」(spiritus)というのは、その本性から言へば正にこの「魂」（anima）に外ならぬが、その働きが違う。すなわち「魂」とは、身体を生動せしめ、身体を通して働く場合の「魂」である。しかしてこの「霊」はしばしば聖書の中では「生命」の意味に用いられる。それは、「魂」は身体なくして生きることも出来ようが、身体「霊」なくして生きることが出来ないからである。この部分は、我々の見る如く、睡眠時にも生きかつ働いて、止む事がない。しかしてその本性は捕捉し得ない事物を把捉するところにはなく、理性が認識し計量し得るものを把捉するところにある。つまりここでは理性がこの家の光なのである。【３０頁】

スピリットは、幽霊であり、お酒です。

ディケンズの小説『クリスマス・キャロル』に出てくる「過去」「現在」「未来」の三人の「幽霊」はこの「スピリット」です。守銭奴でケチな金貸しの老人スクルージが、悔い改めて善人になるようにあの世からやてきた使者です。おかげで、スクルージは善人になりました。また、「スピリット」は、お酒で言う「気」のことであり、お酒そのものもいいます。また、「幽霊」のことも言います。それで、次の洒落が産まれます。それで、この小説の最後は、「彼は、それ以来、幽霊(ｽﾋﾟﾘｯﾄ)との交渉はなかったが、彼はその後は絶対禁酒主義を奉じて暮らしていった」（He had no further intercourse with Spirits, but lived upon the Total abstinence Principle, ever afterwards;）と言う文章で締めくくられています。すなわち、「幽霊＝スピリット(お酒)」とは完全に縁を切ったので、結局、「絶対禁酒主義（the Total Abstinence Principle）になった」と洒落を言っているのです。

第２曲　ソプラノⅡのアリア「エト・エクザルターヴィット」ニ長調 3/8拍子。



この第２句は、第１句のような賛美の歌ではなく、心からなる喜びの歌です。弦合奏と通奏低音のリトルネロが躍動的な序奏を短い音符を軽快に奏でます。この合奏と柔らかい声の第２ソプラノとの喜びの感情の交歓がとてもさわやかです。歌は、母音を延ばして「ア〜、 ア〜」とメリスマ風に気持ちよさそうに歌います。メロディは、飛び跳ねるよ

うに上昇して、小躍りするように跳ねながら降りてきます。大きく２回歌いますが、だんだん、喜びの度合いが高くなっていきます。それを合奏が、囃(はや)すように歌に寄り添います。とても楽しい、喜びに満ちた舞曲のようにスピリットが踊り戯れます。最後に、「わたしの救い主」（salutari meo）を慎み深く歌って終わります。

３　身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。今から後、（いつの世の人も）　わたしを幸いな者と言うでしょう、 “quia respexit humilitatem ancillae suae. Ecce enim ex hoc beatam me dicent”

ここでの聖句は、第１句と第２句でみた「なぜ、マリアが神を賛美し、喜び讃えるのか」について、マリア本人がその理由を述べるのです。この「マニフィカート」の聖句の中で、「この句が一番重要である」とルターは言います。神が、人間に神の子を産ませるのに、貴族でも、お金持ちでもない、身分の低い（humilitatem：はしため）、下女（ancillae）のマリアに目を留めて（respexit）、選んでくださったことに対して、選ばれたマリアはその名誉を重んじて神を讃えたのです。これが、マリアの魂と霊が、神を「マニフィカート」（賛美）する理由なのです。マリアは、ただただ、神さまを信じる信心深い「普通の女」であったことです。それなら、だれもが神の子を産む機会があることになります。これもまた、神の偉大さです。「これからずっと」（Ecce enim ex hoc）、だれもがマリアのことを「幸いな者」（beatam）と言うでしょう。一時は、悪魔の子を産むのではないかと恐れていたマリアでした。同じ経験をしたエリサベツでしたが、もう、おちついたものです。マリアは、エリサベツの祝福の言葉を得て、天使が言った通りに、本当に神の子を宿したことを信じ、それを受け入れたのです。

そのことを、ルターは次のように説きます ―

「フミリタス」（humilitas）とは人に侮られる、見すぼらしい、卑しい状態ないし境遇に外ならないので、例へば貧しい人々、病む人々、飢えている人々、渇いている人々、捕らわれている人々、悩んでいる人々、死にかけている人々はそれである。試練に遇うたときのヨブ、領国から逐ひ出されたときのダビデ、窮迫したときのキリストならびにすべてのキリスト信徒たちもさうであった。それはすでに、神の御目はただ底深くを見て、人の目はただ高きを見る、すなわち、言ひ換えれば、人の目は見栄えのある輝かしく美しい状態や境遇を見る、と言ったときのあの底深いところである。【５１頁】

また、ルターは次のようにいいます ―

私は「humilitas」というラテン語をドイツ語に翻訳して「無なること」あるいは「見すばらしいもの」とした。それゆえマリヤの言わんと欲するところは次のごとくになる ― 「神は貧しい、人の侮る、見すぼらしい娘の私を顧み給うた。けれども神は富裕で、貴く、気高い、権勢ある女王や君侯貴人の姫君をも確かに見いだしたもうたことであらう。本当に神は確かにアンナスやカヤパの姫君を見出すことをえたもうたに達ひない。この人々は国中の最高主権者であろうから。それだのに神はただ慈愛に充ちたその御目を私の上にそそいで、この人々が蔑すむ賤（しず）の乙女をこれに用いたもうた。それゆえ、何人も、自分はその資格があったとか、あるとかと言って、神の御前に誇ることは出来ない。私もまたそれが純然たる恩寵であり、慈愛であり、私の功績や価値は全く無であることを告白しなければならない」と。【５２頁】

また、ルターは一つの話をして、最高主権者たちの邪悪で利己的な人間の心について次のような例を挙げて諭(さと)します ―

> コンスタンツ会議のころに二人の枢機官が馬で野を通っていたところ、一人の羊飼が立って泣いているのを見た。一人の枢機官は親切な人であったので、そこ通り過ぎないでその男を慰めてやろうと思い、その方へ乗りつけて、どうしたのかと尋ねた。すると羊飼は激しく泣いて、なかなか訳を言おうとしない。枢機官は心を痛めたが、ついにその男は口を開き、一匹のヒキガエルを指び差して言った、「私の泣くわけは、この私を神さまはこんな立派な物に造って下さって、このヒキガエルのように醜くはなきらなかったのに、私はそれに気がつかず、神さまにお礼も言はず、讃美もしなかったからです」と。枢機官は、はっとして、その言葉に驚いて馬から転げ落ちた。人々は彼を家の中に担ぎこまねばならなかった。そのとき彼は叫んだ、「おゝ、聖アウグスティンよ、本当にあなたの言はれたことは真実でした。無学な者が起ち上って、我々の代りに天国を占め、我々はこの知識を抱きながら血肉の問を彷徨しているのです」と。【６４頁】

マリアは、まさに、このフミリタスな羊飼いです。この主の母マリアが自らを「フミリタス」と言ったときに、私たちはこぞって椅子から転げ落ちなければなりません。

> さて思うに、その羊飼は富裕でもなく、美貌でもなく、権力家でもなかつたに違いない。にもかかわらず、彼は神の財物をそのように深く考察し、自分の中に究めつくし得ないほど、多くの財物を見出して、これを感謝したのである。自分の中になされた神の第一の御業を、それはその御顧みであるとマリヤは告白する。それはまた最大の御業であり、他のはみな、これに依存し、またみなこれから出てくる。なぜと言へば、若し神がその御顔を誰かに向けて、その人を顧み給ふということになれば、そこにはただ恩寵と福祉とのみがあり、すべての賜物と御業とはこれに従って来るはずである。【６４頁】

第３曲　アリア（ソプラノⅠ）「クィア・レスペクスィト」ロ短調４/４拍子。

「愛のオーボエ」の名称を持つオーボエ・ダモーレの独奏によるしみじみとした序奏で始まります。高い澄んだ声の第一ソプラノが、ゆっくりと Adagio で、「この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました」と歌います。まさにオペラのアリア「カヴァティーナ」（内省的なアリア）です。マリアは、へりくだっているのでしょう、ここでは下降する音型で歌います。仲良く福音を伝えるオーボエとソプラノのデュエットを通奏低音（チェロ）が支えます。この句の「これからずっと」（Ecce enim ex hoc）を受けて、つづいて次の句「いつの世の人も」（omnes generationes）が歌われますが、ここでは、突然、大合唱になります。

４　いつの世の人も“omnes generationes”

「（今から後）いつの世の人も」（omnes generationes）と時代を越えて沢山の人々がマ

リアを賛美するので、ここでは全合唱が参加して「オムネス、オムネス」（すべての、すべての）となんども繰り返して歌い、マリア賛美の大集団を結成します。「マニフィカート」は、神を賛美すると同時にマリアをも賛美するのです。

ルターは、ここで、ややこやしいことをいいます ―

> ラテン語の「omnes generationes」を私は「子の子」と翻訳した。もっとも逐語的には「すべての世の人」を意味する。だが、そういってしまっては、はなはだ曖昧であって、そのために、ある人々はこれについて、「およそすべての世の人が彼女を幸いと言ふ」ということは、どの程度まで真実か。【７０頁】

ルターが問題にしているのは、マリアが、「すべての世の人」というとき、その人たちのなかには、「ユダヤ人ではない人たちや異教徒の人たちも含まれているのか？」という疑問です。

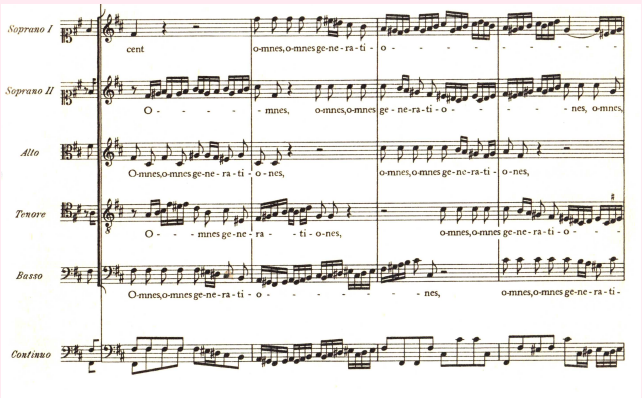
それで、ルターは、「今から後、『いつの世の人も』というときは、血族であり、血縁関係の全体のことである。それは、父から子へ孫へとつづく血統の系列を意味すべきである」というのです。【９０頁】

> ユダヤ人や異教徒や多数の悪質のキリスト信徒は彼女をたたえ、あるいはすくなくとも幸いということをこばむのではないかと、非常に頭を悩ましたのであるが、それは彼らが「世の人」という言葉を人々の全体を言ふものと考へるからである。しかし、この場合、その意味するところは、むしろある者がほかの者のあとから生れてくるという自然的出生の（血統の）系列である。すなわち、父、子、孫か、その各項は世と称する。【７０頁】

> それで処女マリヤのいわんとするところは外でもない、自分に封する賞讃も世から世へとつづいて、自分の賞讃せられないような時はないであろう ― というのである。そしてそのことは彼女が「見よ、今より後すべての世の人」と言っていることによって明らかである。この言葉は「それは、いま、始まって、子の子に至るまですべての世代につづく」という意味であるから。【７１頁】

第４曲　合唱「オムネス・ゲネラツィオネス」ヘ短調４/４拍子。

「いつの世の人も」という歌詞が、全合奏の伴奏を得て、五声の合唱によって歌われる壮麗なカノンです。最後は一瞬止まってから、無伴奏の合唱だけで「omnes generationes」とこの世の人たちによって歌われてから、全合奏も加わって大きなスケールで締めくくります。マリアの賛歌が、ただ優しく、慎ましやかであるだけでなく、一人の乙女からこの世を支配する偉大な人物が現れることを力強く予言するのです。マリアをあなどってはいけません。音楽が、小さな 16 分音符が素早く動く「動機」で出来ているのは、冒頭の合唱「マニフィカート」の再現です。



5　力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、 “quia fecit mihi magna, qui potens est,　et sanctum nomen eius,”

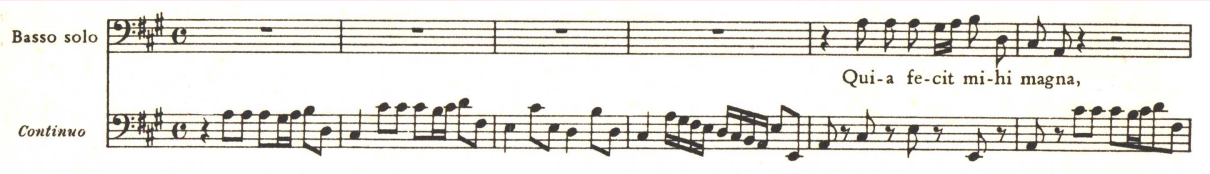
男声の登場です。バスのソロが、チェロのソロと共に、堂々と神への感謝を歌います。バス歌手本人が、「力ある方」（potens）となって歌うのですから堂々としていなければなりません。この「マニフィカート」の聖句は、マリアの主に対する感謝の言葉なのですから女声であるべきなのですが、ここで男声が歌うのは、「力ある方」本人がわざわざ登場するからです。神の子をこの世に送り込むという「偉大なこと」(magna) を「私に (mihi) なさせました」（quia　fecit）とマリアはいいます。マリアは、神の子を産むことを覚悟したのです。力ある方の「その御名は尊く」（sanctum　nomen）とバス歌手は自らを讃えます。この神は、まだ、イエスは産まれていませんから、ユダヤ教の神ヤハウェのことをいうのです。

この詩句の「偉大なこと」について、ルターは次のようにいいます ― 」

「偉大なこと」（magna）とは外でもない、彼女が神の御母となったことである。彼女に授けられたこの御業は何人も把握しえないほどに莫大な偉大な財物である。なぜなら、それからあらゆる賛辞とあらゆる福祉とが生れてきて、彼女が全人類の中で万人を越えた無類の人物であるという結果が生れて来る。彼女に比べるべき者はいない。天の父と共に子を、しかも、かかる子をもつのであるから。しかも彼女自身はそのそのことが際限もなく大きいために、これをいかに呼ぶべきかを知らず、ただ燃え立ち沸き立つ思ひに、それは言い尽くしがたく測りがたい偉大なことである、と言ひ出でるに止まるより外はない。【７９頁】

それゆえ彼女を「神の御母」と呼ぶのは、一言にして彼女の栄誉のすべてを総括したのである。何人もそれ以上に偉大なことを彼女について、また彼女に向つて言ふことは出来ない。たとえ、木の葉や草や空の星、海の砂ほどに多くの舌をもっていようとも、それは出来ない。また、神の御母であるとはいかなることか、それも心に考へてみなくてはならない。【７９頁】

第５曲　アリア（バス）「クィア・フェチト」イ長調３/４拍子。



バス歌手と伴奏の通奏低音だけの二人の曲です。最初から伴奏が、重い荷を背負ったような音型で、どんどん先に進みます。そのあとをバスのソロが追いかけながら、「力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださったからです。その御名は尊く」と歌います。バスは、少し滑稽に感じるほど、明るく楽しそうに歌います。最後は音階になって、「ドシラソファミレド・ソソド」で軽妙に終わります。

６　その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます。 “et misericordia eius in progenies　et progenies timentibus eum.”

突然、音楽はとても優しく、12/８拍子で、柔らかな、慈愛に富んだものに代わります。それは、弦楽器群が弱音器をつけているからです。ここの聖句でのキーワードは「misericordia」（憐み）です。「cor」はラテン語で「心・心臓」を現します。シェイクスピアの悲劇『リア王』の主人公の唯一の理解者は末娘の心優しき「コーディリア」（Cordelia）でしたね。神の慈愛の深さを、アルトとテノールの二重唱が動きの少ないメロディで、つつましやかに、静かに歌います。

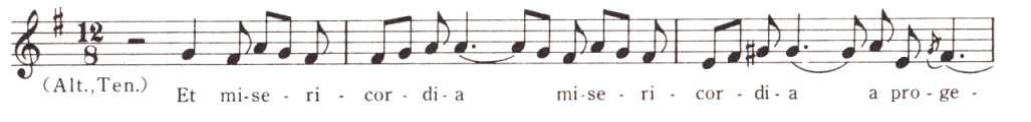
> 神は世に属するすべてのものを三つの部分、すなわち智慧と権勢と富とに分ち、そしてこれらすべてを粉砕して、これに誇るな、そこでは自分を見出せないであらう、また自分もこれを良しとはしないといい、これに他の三つの部分を対立せしめたもう。すなわち憐みと審きと正義とである。「我はそこにいる」と神は言いたもう、「しかり、我はそれらをすべて行う。我はいと近くにいる。これを天におこなうのではない、地におこなのである。人はそこに我を見出す。我をそこに認める者はそれらをたのみ、それらを誇ることをえる。なぜなら、彼が智慧ある者にあらずして心貧しい者であるならば、わが憐みはこれにかけられる。かれが権勢ある者にあらずして圧政せらるる者であるならば、わが審きはそこに行われてこれを救うであろう。彼が富める者に非ずして貧しく乏しい者であるならば、それだけ一層わが正義はこれに施こされる」と。【９２頁】

この「憐み」の句について、ルターは。反対の視点から論じます。それは、「主を畏れない者には主の憐みはない」と説くのです。

> それがこの句、「その憐みは代々彼を畏るる者に在り」の語るところである。マリヤは最高最大のものから始める。というのはすなわち霊的内面的な財物のことで、これは地上で最も傲慢な最も自信の強い最も強情な人々を作るところのものである。富める者も権勢ある君主も、かかる自信家ほどに驕慢（きょうまん）で鉄面皮な者は一人もいない。かかる自信家は、自分は正しいことをよく理解していて、他の人々よりも賢いのだと自惚れ、自負している。ことに彼が譲歩し、ないしは誤ちを自認すべきことの判然としている場合に、彼は実に厚顔にも、全く露ほども神を畏れることなくして、自分は間違うはずがない、神は自分の側についていたもう、他の者共は悪魔の配下だとあえて呼称し、あえて神の審きに訴へる。そして権能と権力とを獲得しえたならば、突進して自分の意志を押し通す。彼はすべて自分に反封する者を迫害し、断罪し、呪い、殺致し、放逐し、惰乱せしめ、しかして後言うには、自分は神に仕へその栄光を顕わさんがためにこれをなしたのであると。【９４頁】

不思議なことに、ルターは、この稿で、「憐み」そのものについて語っていません。マリアが、神の憐みをどう思っていたか私たちは知りたいのです。でもルターは、若きフリードリヒ公に「神を畏れぬ自信家になってはならぬ」と説くのに懸命で、憐みについて述べる余裕がなかったのです。残念です。その点、バッハは、神の意を汲んで、とて優しく、哀れみ深い音楽を書きました。

第６曲　アルトとテノールの二重唱「エト・ミゼリコルディア」ホ短調12/８拍子。



短調です。「その憐れみは代々限りなく」と歌う美しくも優しいアルトとテノールの二重唱です。それを、二本のフルートと弱音器をつけた柔らかな弦の伴奏が飾ります。特に、拍子が 12/8 ですから、１小節に三連音符が４つあることになり、ゆっくりした４拍子で、静かな小川を流れる小舟のように、音楽がたゆたいながら流れます。これこそ、神がマリアに与えた、優しき恩寵です。

７　主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、
“Fecit potentiam in brachio suo, dispersit superbos mente cordis sui:.”

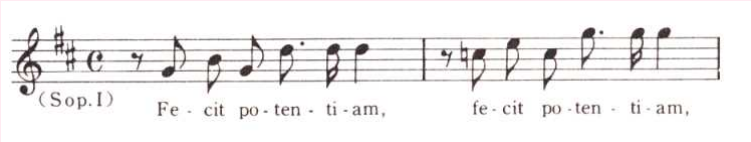
この聖句は、一番ルカ伝の特徴を現しています。逆転の発想です。革命的です。弱くて貧しい、平凡な一般的庶民の悩みや嘆きをなくすために救い主イエスがこの世に現れるとするのが「新約聖書」の教えです。その使命は、具体的には、いま、栄えて、威張っている、王さまや貴族やお金持ちたち（superbos）を「御腕」（brachio）の「力」（potentiam）で「打ち砕いて」（dispersit）、庶民のための世界にすることです。そのことを、この聖句とこれ以降の聖句で神の力を語るのです。そして、その肝心の救い主である神の子をマリアが産むのですから、これはマリアにとって大変です。

ここで、一番、マリアがしてはならないことは、自分が神に選ばれたことで心が昂(たか)ぶることです。そのことを、ルターは、マリアと未だ若いザクセン公ヨハン・フリードリ

にいっているのです。

さて、この「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし」という言葉に注意せよ。この打ち毀ち給ふ御業の行はれるのは、正に彼らがこの上もなく賢明で、自己の智慧に満ちている時である。その時神の知恵は明らかに全然そのところに存しない。しかし神が彼らを打ち毀たうとしたまうなら、彼等に神の永遠の知恵を失わせて、自己のあわい、短い、過ぎ行く知恵で満ちさせ給ふことよりも良い方法があらうか。それゆえマリヤは語る、「思い上がる者」と。すなわち彼らには、彼ら自身の見解、思慮、理解など、神でなくて彼ら自身の心が与えるところのものが、その意に適い、あたかもそれのみが何よりも一番正しく、一番善く、一番知恵あるものであるといわんばかりである。そのために彼らは神を畏れる人々に立ち向い、その見解と正理とを圧伏し、これを散々に打ち毀ち、迫害して、ただ自分たちの擁するもののみが正しく、自分たちの擁するもののみが存続することを求める。しかしてこれに成功する時、彼らは大いに誇りかつ高ぶる。あたかももユダヤ人はキリストにその如くなしたのであった。しかし、彼らは、かくすることによって彼ら自身の擁するところのものが打ち破られ、打ち毀たれ、これに反してキリストは挙げられてあらゆる栄誉を享けたもうたことを悟らなかったのである。【１１３頁】

第７曲　合唱「フェチト・ポテンツィアム」ト長調４/４拍子。



これまで、ソロや二重唱で歌われてきたおだやかな神の優しさが一転して、全合唱が、「主はその腕で力を振るい」と、怒れる神がこの世で振る舞う強大な御業（みわざ）を高らかに歌います。テノールから始まる「順列フーガ」です。ほとんどが、「ポテンツィアム」（カで）と「フェチト」（なす）という２語でうたわれ、最後に、「神は御腕で」（インブラキオ）と「神は御心で」（メンテ･コルディス）、「思い上がる者たち」（スペルボス）を「打ち砕くのです」（デスペルシット）と締めくくります。要所要所で、トランペット群とティンパニが総出で、大音響で鳴り響き、巨大な神の大きな力を現します。この間、最初から最後まで、通奏低音は「恐怖の動機」をなんどもなんども繰り返し奏します。

【恐怖の動機】

最後は、「アダージオ」（adagio：ゆるやかに）になっていったん音楽を止めて、「メンテコルデス・スウイ」（mente cordis sui：神は御心でなす）をゆっくりと２回歌って厳粛に終わります。

8　権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、 “deposuit potentes de sede et exaltavit humiles;”

この聖句も、ルカ伝の特徴を現しています。逆転の発想です。革命的です。神は、「（カぁ

るものをその座から）引き下ろし」（deposuit）で始まり、その代わりに、マリアたちのような「身分の低い者（humiles;）を引き上がる（exaltavit）」と歌います。

なぜわざわざ、このような過激な文言を「マニフィカート」に加えたのかといえば、マリアの貧しい身分が問われたときの言い訳です。そしてまた、ルターは、ここにも「マニフィカート」の真意をみます。『君主論』です。聖句は、支配者階級にも警告を与えているのです。受胎を告知する天使は、あちらこちらの娘たちを訪れて、マリアに言ったことと同じことを告げて廻ったに違いないのです。お金持ちのカヤパの娘も、司祭たちの娘も、その家を訪ねたことでしょう。でも、すべて断られました。仕方なく、貧しい身分のマリアのところへやって来たのです。天使は、断られたことのその口惜しい思いをここで延べたのです。マリアの口を借りて。

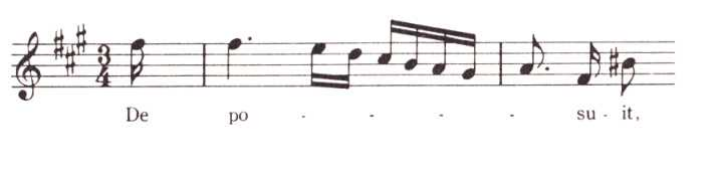
それで、ルターはいいます ―

> 注意せよ。マリアは、「神が権威を打ち砕きたもう」とは言わないで、「権力ある者をその座から引き降ろし」という。また、「神は卑しい者を卑しいままで捨ておきたもう」とは言わないで、「身分の低い者を高く上げ」という。しかり、世界の存在する限り、官憲、統治、権力および権威は存続しなければならぬ。けれども彼らこれを神に逆らう悪い仕方で用いて、正しい人々に不正と暴力とを加へたり、また、これを享楽し、これに誇って、神を畏れつつその賛美と正義の擁護とのためにこれを用いなかったりするならば、神はこれを許してはおきたまわない。これは我々があらゆる史籍と経験との中に見るところで、神は、一つの王国を打ち立てて他の王国を打ち倒し、一つの侯国を興して他の候国を抑え、一つの民を殖（ふ）やしたもう。【１２０頁】
>
> 同様に神は、理性や知恵や正理をも滅ぼしはしたまわない。なぜなら、もし、世界が存続すべきなら、人は理性や知恵や正理を持たねばなるまい。否、神が滅ぼしたもうのは高慢と高慢な者どもとである。すなわちそれを自分のために用い、それを享楽し、神を畏れず、義人と神の正義とをそれで以て迫害し、かくてその美しい神の賜物を悪用して神に逆らうの具となす者どもである。【１２０頁】

ルターは、「身分の低い者を高く上げ」について、つぎのようにいいます ―

> この場合の「卑（いや）しき者」は謙虚なる者のことではなく、むしろすべて世に見栄えのない者、全く無なる者とのいいであらねばならぬ。なぜならこれは正にマリヤが自分自身のことを告げて、「彼はその婢女（ひじょ:召使い女）の無なるを顧み給へり」と言っているのと同じ言葉であるから。もっとも心から好んでかくまで卑しく無なる者となり、尊貴なることを求めぬ人々は、確かにまた謙虚な人々ででもある。次に「高く上げ」を解して、神が彼ら（卑しき者）をその引き下したもうた者どもの権位と地位とに据え給ふとしてはならない。それはあたかも神が己を畏れる者に憐憫をかけたもうときに、これを大学者、すなわち、傲慢な者の地位に据えたもうたまわないのと同じである。否、むしろ神は彼らにもつと多くのものを与え、彼らが神に在り霊に在って高く、ここにおいても彼らにおいても、権威と権力とすべての能力との上に審判者となることを得しめたもう。しかり、彼らあらゆるゆる学者や権力者よりも多くのことを知っているのである。【１２３頁】

第８曲　テノールのアリア「デポスイト」嬰ヘ短調３/４拍子。



短調の激しい音楽です。怒りながら走っているとても速い場面です。テノールのソロが、「（力あるものをその座から）引き下ろし」（deposuit）と上下する音型で、悪者を激しく追い立てるように歌います。「デポスイト」のアクセントは、「デ**ポー**スイト」と「**ポー**」にあるので、必ず「**ポー**」が小節の頭にきて、悪者を離しません。オーケストラは前奏と中奏と後奏を単独で受け持ち、テノール・ソロのエネルギーを注ぎます。

９　飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。 “esurientes implevit bonis, et divites dimisit inanes.”

前句につづいて、ここも富める者と貧者が主の御業（みわざ）によって逆転する話です。今度は、女声のアルトのソロで歌われるので、この句の主人公は、飢えた人を満足させるという側の神ではなくて、神の恩寵を受けた側の女性なのです。ここでは、幸せになった女が、長調で、おだやかで明るい楽想で、神への感謝を「メリスマ」でゆっくりと歌うのです。「飢えた人」（esurientes）を「良い物で」（bonis,）「満たし」（implevit）、「富める者」（divites）は「空腹のまま」（nanes.）で「追い返されます」（dimisit）とアルトはこの聖句を２度歌います。

ここでもまた、ルターは、「飢えた人」について説明しますが、なんだか良く分かりません ―

「飢えた人」というのも、食物をわずかしか持たぬ者、あるいは、全然持たぬ者のことではなく、自ら好んで欠乏を忍ぶ者、特に彼らが神のため、あるいは真理のため、他人に暴力をもって迫られて、その欠乏を忍ぶ場合の言いでなければならぬ。卑しく、惨（いたまし）く、乏しいことにかけては、悪魔や罪に堕された者、またその悪行のために責め苛まれ、餓え死にさせられ、絞め殺される者、およびすべて自ら欲せずして卑しく乏しくある者に過ぎるものがなにかあろうか。しかもそのことはなんら彼らの役には立たない。いや、むしろそれは彼らの苦情を一段と増加拡大する。神の御母の述べているのは彼らのことではない。むしろ自ら神と一つであり、また神がこれと一つであり給うがごとき者、すなわち、神を信じ、神に頼る者のことである。【１２５頁】

では、富める者は、どうか ―

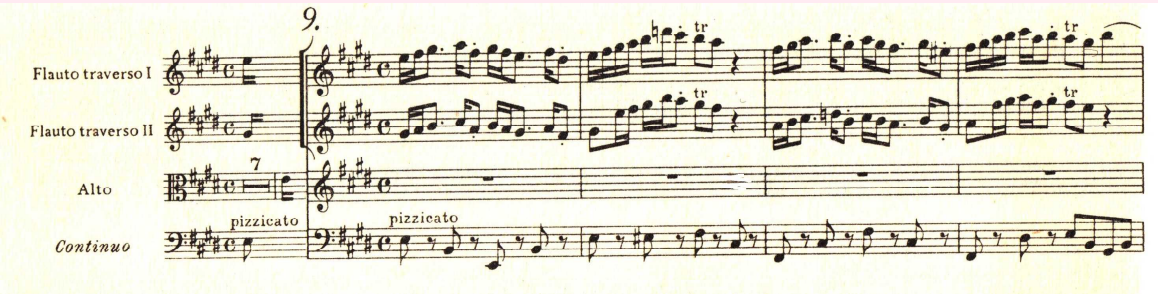
我々は飢餓と窮乏とがまだ来ない前に飽き、あらゆる物に充ち足ろうと欲し、将来の飢餓と窮乏とに備えて貯蓄をしようと欲する。すなわち、かくして、もはや神とその御業とを必要としないようにすることである。これはなんという信仰であらうか、自分に自らを助けうべき貯蓄のあることを感じ、これを知る限りにおいて、神に頼るとは。不信のために我々は、神の御言葉、真理、正理が屈して、不正が勝つのを見ながら、これに対して沈黙し、その非をならさず、これがために弁論せず、事態を防止せずして放置する。なぜか？　我々はわれわれ自身も攻撃を受けて貧窮におとしいれられはしないか、

そうなれば我々は餓えて死に、永久に没落せしめられはしないか、という懸念をもつのである。しかしそれはこ世の財物を神以上に重んじ、神の代りにこれを偶像にしていることを意味する。しかしてそのとき、我々はこの「神は卑しき者を挙げ、高き者を低くし、貧しき者を満たし、富める者を空しくし給ふ」という慰めに充ちた神の御約束を聞き、また、理解する資格を失い、また、それゆえにその御業を認識することも決してない。【１２７頁】

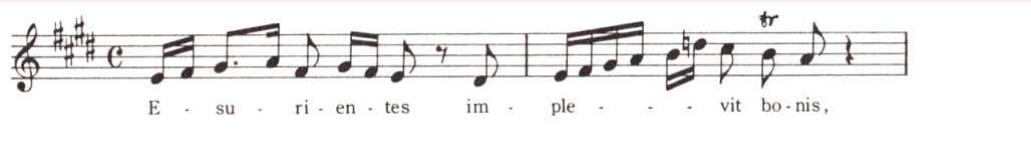
この言葉は、ルターならではの鋭いものです。やはり、『君主論』です。君主を初め、人は富んでいるときには、神など必要としません。「富は神の偶像」なのです。でも、富める者は、空腹で追い返されても、痛くも痒くもありません。前の文章に戻れば、「富める者」が「飢えた人」となるのは、「すべて自ら欲せずして卑しく乏しくある者」なのです。その結果、そのとき、彼らも神を必要とするのです。「むしろ自ら神と一つであり、また神がこれと一つであり給うがごとき者、すなわち、神を信じ、神に頼る者のことである」とマリアはいうのです。すなわち、マリア自身のことです。そして、ルターが望んだ、若い指導者ザクセン公ヨハン・フリードリヒのあるべき姿でもあります。

第９曲　アルトのアリア「エスリエンテス」ホ長調４/４拍子。

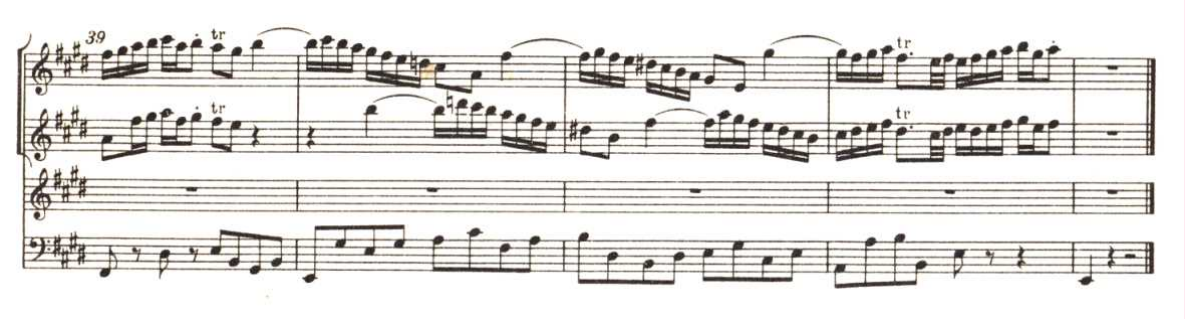
最初、二本のフルートが平行６度で揃って、ゆっくりと長く主旋律を吹き始めます。また、二本のフルートが揃って奏でるトリルがきれいです。通奏低音は、前奏と間奏と後奏で活躍します。アルトが歌うホ長調のアリアは、オペラの「カヴァティーナ」のように、深く、広く、心の奥の隠された思いを歌います。植えた女の歌声は、アンサンブルを作る対になった二本のフルートと終始ピッツィカートで鳴る通奏低音のリトルネロで支えられます。



アルトソロが、重要な「満たし」（implevit）と言う言葉を、「インプレェ〜」と母音だけで長々と伸ばすメリスマ唱法で４小節にわたって歌ってみせて、まさに、「良いもの」で周りがだんだんいっぱいに満たされていく様子を見事に描いて見せます。



最後は、フルートの「ドレミファ・ソミファ」と鳴って、「ファ」という不完全な導音のままで終わります。次の優しい女声三部の歌へと導くためです。



１０　その僕（しもべ）イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません、
“Suscepit Israel puerum suum, recordatus misericordiae,”

ソプラノ１とⅡとアルトによる女声だけの三重唱です。静かに、心から祈る如く、マリアが主への感謝を歌います。「古くからの神の僕（puerum）であるイスラエル族の娘を覚えていて下さり（recordatus）、憐れんで（misericordiae）くださった」と女声三声が天使の声となって優しく歌います。

この聖句も、重要なものなのです。マリアならずとも、不信に思うのは、「なぜ、いまごろになって神は、神の子をこの世にお遣わしになられたのか？」という疑問に答えなければなりません。そこで、突然、「イスラエル」という言葉が出てきます。これは、イエスやマリヤやモーゼなどの人物がイスラエル人、すなわち、ユダヤ人であることを示しています。マリアが、神と呼んでいるのはユダヤ人の神、「ヤハウェ」のことなのです。ヤハウェは、モーゼよりも 400 年前にアブラハムたちイスラエルの民に誓ったのです ― 「かならず、神の子がこの世に現れる」と。このことは、この聖句「マニフィカート」の最後で述べられます。
ここでマリアはいいます ―

> 神のあらゆる御業のなかでも主となる大きな御業、すなわち神の御子の人化（人間として降臨）をもって閉じる。そしてここに、自分は全世界の婢女（ヒジョ：召使い女）であり。召使いであると素直に告白する。すなわち彼女は，自分の中に成されたこの御業はただに自分のためだけではなく全イスラエルのためになされたと告白するのである。【１３４頁】

ルターは、また、つづけて説きます ―

> さて、神に仕へるこのイスラエル、これこそキリストの人化によって恵みを受けるところのものである。これはその慈しみ給ふ御民であり、この民のために彼は人とも成って、彼らを悪魔と罪と死と地獄との力から解き放ち、義の中に、永遠の生命と福祉との中に、移し入れようとしたもうた。これが、すなわち、マリヤがここで歌ふ「受け入れて」（Suscepit）である。【１３５頁】

さらに、ルターは、また、つづけて説きます ―

> マリヤはなぜ、むしろ、「彼は自らの隣みを憶え給へり」と言って、「これを顧慮し給へり」とはいわないのか。その訳は、次の句が言うごとく、神はすでにこれを約束しおきたもうたからである。しかるに神は、これを与えることを長らく延引したもうたので、

あたかもこれを忘れたもうたのであるかのやうに見えた。（時代、また、すべてのその御業があたかも神は我々を忘れたもうたのであるかのように思はれるのである）。　しかし神が来たもうたとき、神は忘れたもうたのではなく、むしろ絶えずこれを果たすことを考へ給うたのであることが認められた。しかし、「イスラエル」という言葉はただユダヤ人のみを意味し、我々異邦人（ルターのこと）を意味せぬということは事実である。【１３６頁】

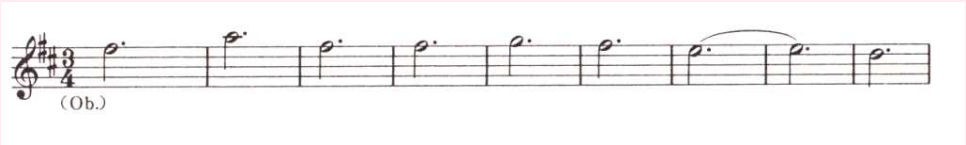
でも、神はなぜ、「神の人化」を長引かせたかと言えば ―

我々はそれらのものを必要としていたが、これを受ける資格を全然もたなかった。それゆえ、そこに、神の讃美と栄誉とが存し、またそれゆえにわれわれの誇りと思い上がりとは沈黙せねばならない。神がかく心を動かし給ったのには、外になんの顧慮すべきものがあったわけでもなく、ただ神の御憐みがあったばかりである。そして、神は、この名を顕そうと欲したもうたのである。【１３５頁】

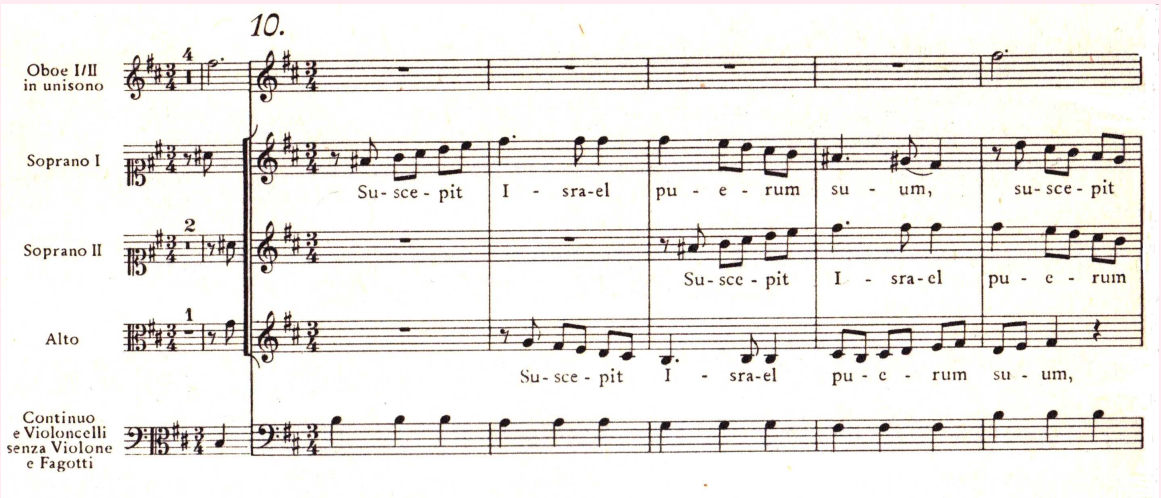
第１０曲　ソプラノⅠとⅡとアルトの女声三重唱「スシピト・イスラエル」
ロ短調３/４拍子。

どの歌のパートも、わざと８部休符を歌の出だしに置いているのは、祈りの柔らかさを表現しようと小節の出だしの強拍のアクセントを殺すためです。女声の三重唱は、主に感謝するマリアの声となって、静かに、短調で、「主は、憐れみをお忘れにならず、その僕(しもべ)イスラエルを助けてくださいました」とフーガのように、互い違いに相次いで歌います。マリアが三人に増幅して、感謝を三倍にしています。

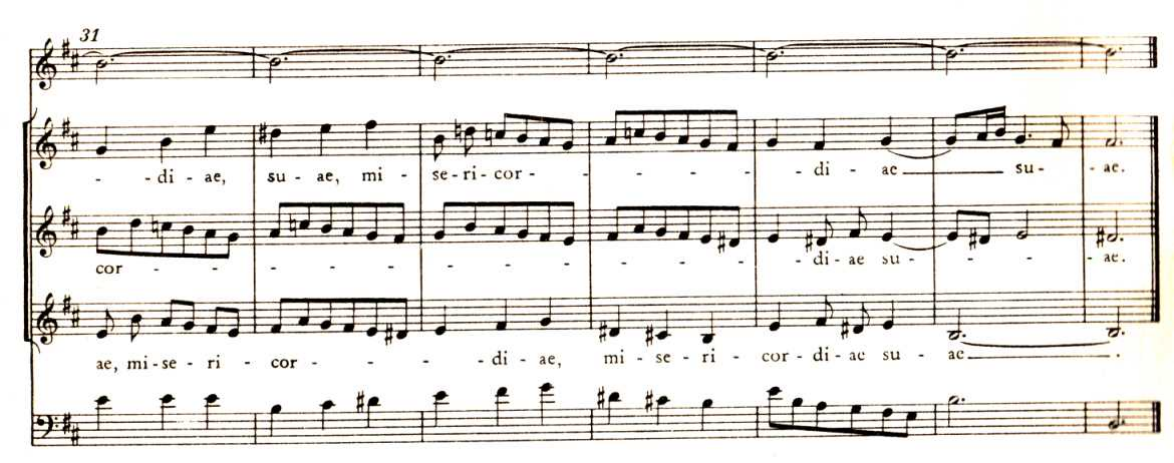
【聖歌旋律】



この女声三部の上に重ねてオーボエ二本が「ユニゾン」（同じ音）で、天空にただよう霊雲のように、定番の「マニフィカート」の「聖歌旋律」（第九旋法）で「オブリガート」（助奏）を奏でます。低音はチェロの通奏低音だけです。



ロ短調の曲の最後に、ソプラノⅡが半音上がって歌い、全体をロ長調の和音で終わらせます。基調が短調であった曲が最後の和音だけを長調に転調して終わるのを「ピカルディの３度」（Picardy third）と言います。モーツァルトの「フリーメースンのための葬送行進曲」が有名です。



１１　わたしたちの先祖におっしゃったとおり､アブラハムとその子孫に対して永久に。
“sicut locutus est ad patres nostros, Abraham et semini eius in saecula”

一変して、今度は全合唱で神を讃えます。オーケストラは入らず、伴奏は低音の通奏低音だけです。「わたしたち（nostros）の父祖（patres）アブラハムとその子孫（semini）とを、とこしえに（in　saecula）憐れむ（misericordiae）と約束なさった（sicut locutus）とおりに」と歌います。ここで、「神が憐れむ」とはなにを哀れむかというと、囚われ、奴隷として働かされているユダヤの民を憐れむのです。

神は、「この世に神の子を降す」とは聖書のどこにも書いてないのですが、ルターは「神がアブラハムになしたもうたお約束は特に創世記第１２章と第２２章に書かれていて、また、そのほかにも多くの箇所で引照されている」と言っています。[140頁]

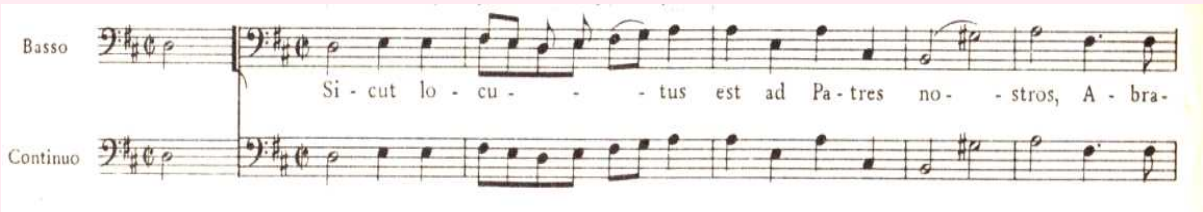
それで、その箇所を読んでみると聖書には次のように書いてあります ―

それで、神はアブラハムに次のようにいいました ― 「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」。【創世記第１２章】

時に主はアブラムに現れて言われた、「わたしはあなたの子孫にこの地を与えます」。アブラムは彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。【創世記第２２章】

神は、ユダヤの民アブラハムに多くのことを約束なさったのです。そのことを、アブラハムの子孫であるマリアは言っているのです。

第１１曲　合唱「シクト・ロクートゥス」ニ長調２/２拍子。



合唱が全員と通奏低音だけです。弦楽器も管楽器も入りません。重要な文言なのに、質素な音楽です。通奏低音のみの伴奏による混声５部合唱による小規模のまとまったフーガです。特に、「わたしたちの父祖」（patres nostros）の箇所は印象的で美しいです。この「フーガ」の形は、言葉をなんども繰り返すことによって「永久感」（イン･セクラ）を出すためです。フーガの名手バッハらしい、力強い確固たるフーガの主題で歌われます。通奏低音は合唱のバスの旋律をなぞります。ほぼ、「アカペラ」（無伴奏）で、感情を抑えて、極めて器楽的です。

１２　父と子と聖霊に栄光あれ、初めにあったように今もいつも代々限りなく。アーメン。
“Gloria Patri et Filio et Spiritui Sancto. Sicut erat in principio et nunc et semper et in saecula saeculorum. Amen.”

いよいよ、終曲です。ここではマリアの言葉ではなく、典礼の規則に則った「栄唱」（Gloria）が歌われます。こう言った賛歌などの終わりには、すべてを祝福する決まり言葉で終わるのです。全合唱と全オーケストラが、堂々たるテンポで、格調ある４/４拍子で、一斉に「主に栄光あれ」（Gloria Patri）と神を盛大に讃えます。「エト」（et=and）で沢山の言葉が繋がれていきます。「父と子と精霊」（Patri et Filio et Spiritui Sancto）は「三位一体」（さんみいったい）のことで、神への呼びかけです。「初めといまとこれから」（principio et nunc et semper et in saecula saeculorum.）も神の栄光がつづきますように祈ります。最後の「アーメン」は「祈りが叶（かな）いますように」という願いの言葉です。

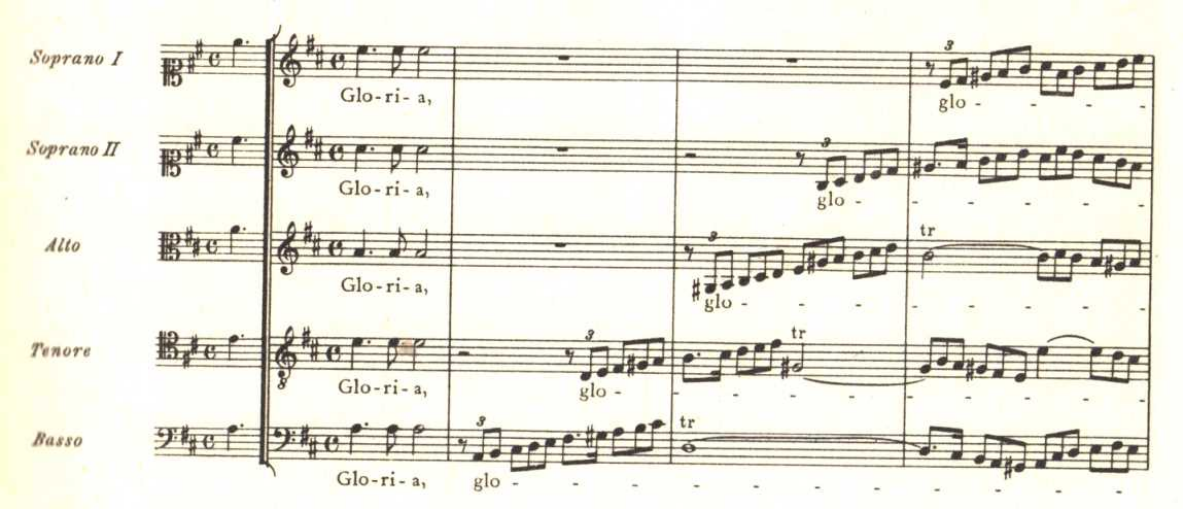
ルターの書にはこの「栄唱」の解説は書かれていません。これは一般に遣われているお祈りの言葉ですから当然です。

第１２曲　合唱「グローリア」イ長調４/４拍子ーニ長調３/４拍子。

壮麗な「グローリア」の叫びと、わき上がるカノンで、全員参加の終曲です。全合唱と全オーケストラが、堂々たるテンポで、格調ある４/４拍子で、一斉に「主に栄光あれ」（Gloria Patri）と神を盛大に讃えます。「エト」（et=and）で沢山の言葉が繋がれていきます。「父と子と精霊」（Patri et Filio et Spiritui Sancto）は「三位一体」（さんみいったい）のことで、神への呼びかけです。「初めといまとこれから」（principio et nunc et semper et in saecula saeculorum.）も神の栄光がつづきますように祈ります。最後の「アーメン」は「祈りが叶（かな）いますように」という願いの言葉です。

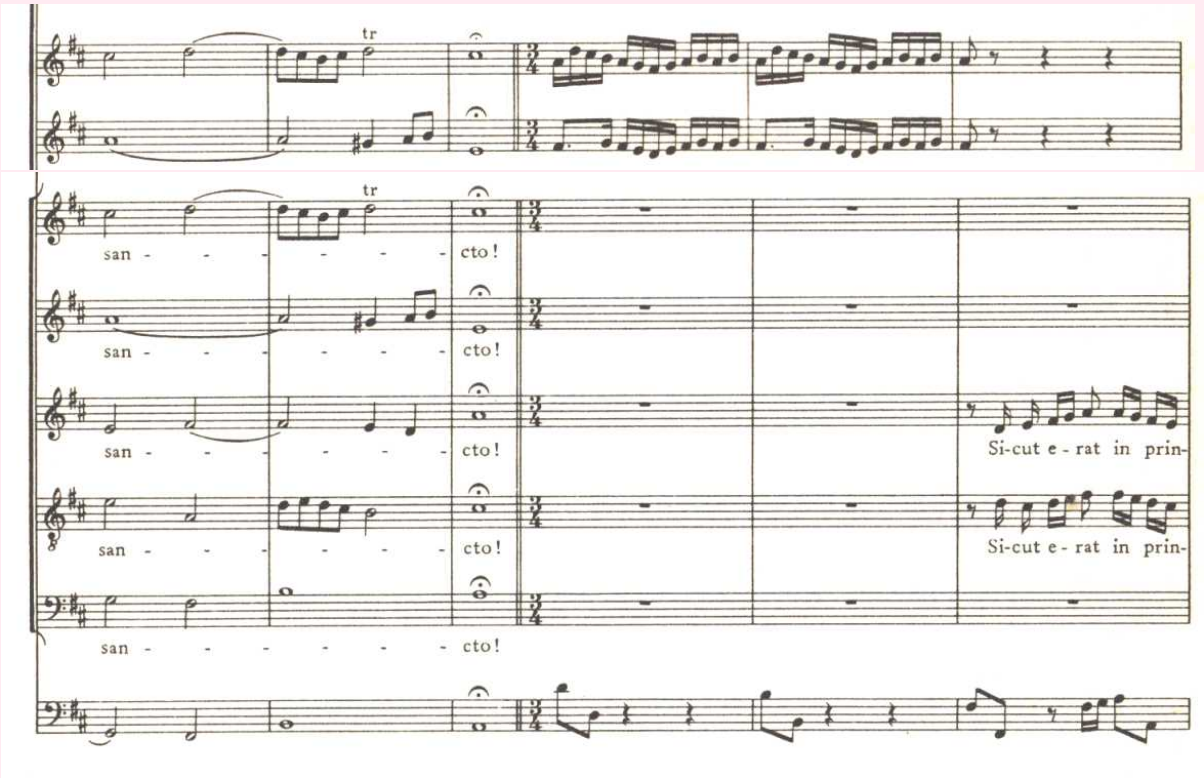
第12曲　合唱「グローリア」イ長調4/4拍子－ニ長調3/4拍子。

【前半】

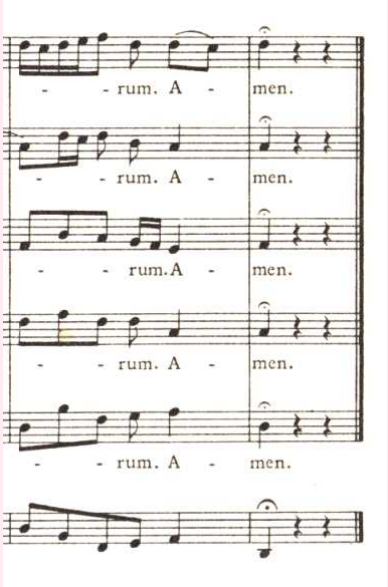


いったん、クライマックスを築いて、急ブレーキを掛けて半終止で終えます。一息ついてここから、フィナーレへと一挙に邁進します。拍子も３/４に替わり、テンポを速めて、「初めにあったように今もいつも代々限りなく（永遠に）」という歌詞とともに、音楽も、「初めにあったように」を受けて、第一曲の「マニフィカート」と同じ旋律で歌って全曲をとじます。このアイデアも、バッハの才覚です。マリアの恐れと疑いを払って、めでたく「受胎の円環」を、最初のメロディと最後のメロディを同じにして環で閉じるのです。

【後半】



最後はフェルマータの付いた４分音符で終わります。もっと長い２分音符か全音符にすれば良いのに、４分音符のフェルマータでは、長いのか、短いのか、よく分かりませんが、短いのでしょう。



これで、バッハの「マニフィカート」の解説を終えます。

ルターの『マリアの賛歌』の結語

このバッハの「マニフィカート」が名曲であるゆえんは、ルターの論文『マリアの賛歌』、原題『マニフィカートのドイツ語訳並びに講解』（Das Magnificat verdeutschet und ausgelegt）の解釈を受け入れているからです。このルターの「マニフィカート論」は、とても優れていて、最高の「マニフィカート」の聖書解釈でもあります。ルターは、私が思うに、この書は二つのことで優れているからです。一つは、「マリアの神への賛歌」として、もう一つは、若い領主のための「君主論」としてです。この二つは、マリアが心から神を賛美する言葉であり、若い領主が常に心得ておくべき信条だからです。

ルターは、まず、第３句の「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです」は、「神は貧しい、人の侮る、見すぼらしい娘の私を顧み給うた。(中略)　神はただ慈愛に充ちたその御目を私の上にそそいで、この人々が蔑すむ賤の乙女をこれに用いたもうた」とルターは説きます。

また、第７句から第９句までの「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」が、重要だといいます。その理由は、この論文の最後で、次のように述べてこの論考を終えます。

> わが寛仁なる君侯殿下よ、私は殿下に『マリヤの讃歌』、ときにその中心点が述べられいる第五節「その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者におよびます」と第六節「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろす」をお薦めいたします。そして殿下がその御生涯を通じて地上のいかなるものにもま

して、然り、地獄にさえもまして、我に神の御母が「mente cordis sui」（神は御心でなす）と呼ぶものを恐れたもうようお願いしかつお勧めいたします。これこそはすなわちすべての人々、特には君主の最も大きな、最も手近かにいる、最も強力で、最も有害な敵でございますから。と申しますのは、すなわち理性や見解ないし判断のことで、すべての方策も統治もこれから発しなければなりませんが、もしこれを常に信頼し難いものと考へて、神を畏れつつこれに従うのでないなら、殿下はこれに封して安心しておられることは出来ませぬ。これは殿下おひとりのご苦慮のことばかりではなく、すべて自己の心をもってことを計る人々の知恵のことを申しているのでございます。何人の心をも軽蔑してはなりませんが、また何人の心にも依頼してはなりません。【１５０頁】

私はそれをここに翻訳いたしましたが、それは殿下がこれをこの説教の実証として本当にいつまでも記憶せられ、神の恩寵に封する豊かな確信をお呼び醒しなさいまして、ゆえに神への畏怖とその御憐憫とが、第五節の歌ふごとく、二つながら存せんことを願ったのでございます。これをもってこの身を殿下に委ねます。願わくば神よ、殿下が善政をお布きなさいますよう、その御統治を御手の中に置き給へ。アーメン。
【１５１頁】

【2022/11/16　都築正道】